立命館地理学　第17号（2005）55～77

1970年代におけるクアラルンプルの社会地理

—Dietrich Kühne "*Vielvölkergesellschaft zwischen Dorf und Metropole: Fortentwicklung und neue Wege der Urbanisation in Malaysia* (1970-1980)" の紹介と検討—

藤　巻　正　己*

Ⅰ．はじめに

本稿では、ドイツの地理学者Dietrich Kühneによる著作『村落から大都市にいたる多民族社会の相貌—マレーシアにおける都市化のさらなる進展と新たな道程（1970～80年）—』（原題：*Vielvölkergesellschaft zwischen Dorf und Metropole; Fortentwicklung und neue Wege der Urbanisation in Malaysia (1970-1980)*, Verbund Stiftung Deutsches Übersee-Institut, Otto Harrassowitz: Wiesbaden, 1986, 538S.）[1] を紹介しながら、1970年代における首都クアラルンプル（Kuala Lumpur：以下、KL）の社会地理的状況についての検討が試みられる。

本書は、ドイツのアジア学（Asienkunde）の中心的役割をはたしてきたハンブルグのアジア地誌研究所（Des Institut für Asienkunde in Hamburg）による研究叢書である。Künheによれば、本書は、1981年2月にマレーシアで開始されてから、17ヵ月間に及ぶ現地調査の成果である。研究プロジェクトの遂行にあたっては、Tunku Shamsul Bahrin 教授などマラヤ大学地理学科やマレーシア政府統計局の協力、またフォルクスワーゲン社からの研究基金を得たという。主題を逐語的に訳述すると奇異な感じを受けるが、本書は、マレーシアという多民族社会（Vielvölkergesellschaft）の村落から大都市に至るまで、さまざまな集落・都市的状況について考察を加えることを企図し、副題からも明らかなように、とくに1970年代におけるマレーシアの都市化状況に焦点を定めた集落•都市地理学的研究である。

筆者が本書に関心を払った理由は、少なくとも三点ある。第一に、本書が対象としている1970年代は、マレーシアの政治経済・社会文化などあらゆる面で、旧植民地的状況からの脱却という「仕切り直しの時代」、さらにその後の 1980 年代の「NIES 段階到達の時代」や、90年代に強化、深化した経済のグローバリゼーションを背景とする「メガプロジェクトの時代」への助走時代にあたる。つまり、70年代は、現在の同国の都市社会、とりわけ首都 KL の社会地理的状況を考察する上で、画期的時代であったからにほかならない（第1表）。第二に、本書のように、1970年代という限られた10年間ではあるが、マレーシア全域のさまざまなタイプ・階層レベルの都市的集落を対象にした研究成果は、類例をみなかったからである。第三に、消極的理由かもしれないが、ドイツのアカデミック地理学が

＊立命館大学文学部教授

第１表　マレーシアの都市社会変動の諸段階と都市景観・社会地理特性の変化

時代（期間）	時代名称	時代背景	都市景観・社会地理特性
第１期 （1957～70年）	新生国家建設の時代	1957年独立（マラヤ連邦）、初代首相ラーマン。 1960年「非常事態宣言（1948年～）」解除。 1963年マレーシア連邦結成。 1965年マレーシア連邦からシンガポールの分離独立。 1969年「5.13事件」（マレー人と華人の民族衝突），非常事態宣言	旧植民地都市的景観，複合社会的・華人都市的状況の残存。
第２期 （1970年代）	開発政治／ブミプトラ政策始動の時代	1970年第２代首相ラザク就任。 1971年非常事態解除。 NEP（新経済政策：～90年）施行。 1976年第３代首相フセイン就任。	マレー人の都市化、華人都市からマルチエスニック都市への移行始動、スクォッターの急増。
第３期 （1980年代）	世界資本「蓄積の舞台」化／NIES 段階到達の時代	1981年第４代首相マハティール就任（～2003年）＝「マハティール時代」始まる。 1983年マレーシア株式会社／「民営化」構想発表。	マレー人比率の増大，「スクォッター都市化」の継続、市街地改造時代の始まり。
第４期 （1990年代）	グローバル都市化・メガプロジェクトの時代	マハティール時代の継続。 1991年「Wawasn（ビジョン）2020」国民開発計画（NDP：～2000年）。 経済のグローバリゼーションの強化・深化、国際会議・イヴェントの連続開催。 1997/98年アジア通貨危機の克服。	メガプロジェクトの同時展開・ムナラ都市化・美化政策の進行に伴う建造環境の急変、行政首都機能のプトラジャヤへの移転、新都市中間層の増大、外国人労働者の急増、90年代後半再定住計画の進展に伴うスクォッターの急減。
第５期 （現在）	トランスナショナル都市化の時代	マハティール時代の終焉。 2003年第５代首相アブドゥッラー就任。	「ワールドクラス都市」をめざした社会環境整備の時代、美化政策の強化、スクォッター社会の解体傾向強化、マレー人－華人比率の均等化。

マレーシアの都市社会に対して、どのような観点からアプローチし、どのような説明・記述を試みようとしたのか、興味を抱いたからである[2)]。

さて、Kühne の著作の紹介と検討を進めるにあたって、1970年代のマレーシア、とりわけ KL において、どのような時代性を帯びた社会空間が生産されようとしていたのか、以下に概観してみよう。

II.「1970年代」のマレーシア都市社会
―とくにクアラルンプルを中心に―

マレーシアが、マレー人およびその他先住民族集団（以上を総称してマレーシア語で「ブミプトラ」*Bumiputera* と呼ぶ）と移民集団の末裔としての華人、インド系住民という三大種族（マレーシア政府の公式的見解！）から成る典型的な多民族国家であること、そしてこのような多民族的状況が英領植民地支配の産物であり、ファーニヴァルがこうした社会

を「複合社会」と呼んだことは、よく知られている。複合社会とは、職業や居住地区が人種・民族・言語・宗教集団別に「すみわけられた社会」にほかならない。

しかし、1957年の独立以来、外国からの移民の管理統制、マレー人の出生率が華人のそれを上回るというエスニック集団間における出生率の差異は、この国のエスニック構成比率を変化させ、マレー人比率が過半数を占める状況を生み出した。また、英領マラヤ時代にあって、マレー系は農村・漁村地域に偏在し、華人など移民集団は都市部に集住するというエスニック集団別にすみわけられた社会状況は、マレー人中心主義的国民統合政策の推進、さらに1969年5月13日の民族衝突（マレー人による反華人暴動）を契機として1971年からNEP（New Economic Policy：～ 1990年）が施行されることにより、「マレー人の都市化」が進行したからである。

NEPとは、第2次マレーシアプラン（1971～75年）と一体化したかたちで打ち出された「新経済政策」であり、工業開発やプランテーション農業の振興などを通じて、①あらゆる貧困の撲滅、②民族間の分業・すみわけという植民地時代に植えつけられた複合社会的状況の再編を推進し、エスニック集団間の社会経済的格差を解消することを目的としていた。しかし、マレー人の社会経済的地位の向上（都市的職業部門への雇用の推進、生活水準の改善、資本家育成など）をねらったものであることから、NEPはマレー人優先（ブミプトラ政策）の一環であるとみなすことができる。NEPの最終年は1990年であったが、目標が達成されなかったとの理由から、ブミプトラ政策は実質上、今なお継続されている。

それでは、独立以降、とりわけNEPが始動しはじめた1970年代以降、マレーシアはどのような都市社会変動を経験してきたのだろうか。これについて、KLを例に、エスニック構成と社会経済階層という2つの社会的構成要素からみてみると、おおよそ以下のような社会再編を経験してきたことが看取できる。まず、エスニック構成の変動状況は、第2表において明瞭に読みとることができよう。すなわち、英領マラヤ時代にあたる1891・1911・1931年当時のKLは、先着・先住民族のマレー人よりも華人やインド系住民など移民集団が多数を占めるという「移民都市」・「華人都市」としての性格が濃厚であった。しかし、1957年のマラヤ連邦独立以後、1971年のNEP実施から10年目にあたる1980年には、KLのマレー化が顕著に認められるようになり、華人都市・移民都市的状況から、文字通りの「マルチエスニック都市」としての風景がより明瞭となってきた[3)]。ちなみに1980年代におけるマレーシア経済の急成長、とりわけ経済のグローバリゼーションが強化、深化する1990年代は、マレー人比率の増加が継続するとともに、労働力不足を背景にインドネシア人やバングラデシュ人など外国人労働者の流入を招いた「外国人労働者急増の時代」として位置づけることができよう。

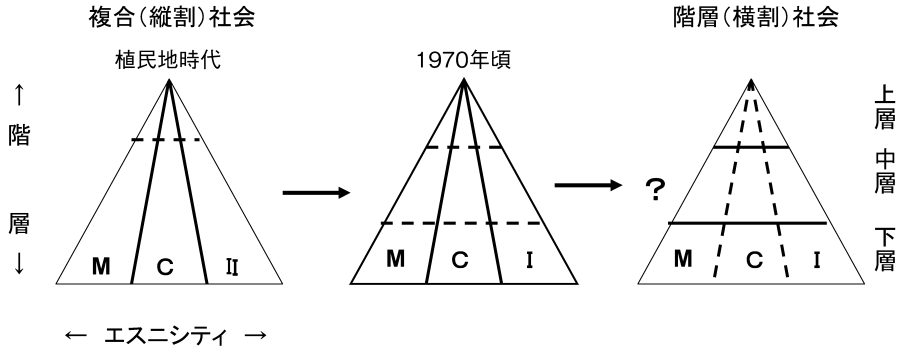
他方、社会経済階層の再編についてみた場合、Everse, H-D.[4)]が1970年代はじめに、マレーシアの都市社会は、それまでのエスニシティにより強く規定された縦割り的エスニック別すみわけ社会から、上層・中層・下層という階層分化がより強く規定する横割り的階級社会への移行を読み取ろうとしたような変動が見られるようになった[5)]（第1図）。

第２表　クアラルンプルのエスニック集団構成比の推移：1891 ～ 2000 年（単位：%）

エスニック集団	1891 年	1911 年	1931 年	1957 年	1970 年	1980 年	1991 年	2000 年
マレー系/ブミプトラ[1]	12	9	10	15	25	33	37	38
華人	73	67	61	62	55	52	46	43
インド系	12	19	23	17	19	14	11	10
その他[2]	2	5	7	6	2	1	6	1
外国人	—	—	—	—	—	その他[3]	その他[3]	8
合計（%）	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
合計（万人）	1.9	4.7	11.1	31.6	45.8	92.0[4]	126.2	142.3

Sidhu［1978］、DBKL［2003］ほかによる。
注 1）1980 年以降、マレー系からブミプトラに名称変更。
注 2）パンジャブ人（シーク）、タイ人、ビルマ人、ポルトガル人など。
注 3）1980・90 年時には「外国人」は、「その他」の中に含まれている。
注 4）1970 年から 80 年にかけて人口が大幅に増加したのは、1974 年連邦直轄領に昇格した KL の行政域が拡大したことが一因となっている。

NEP の進展は結果として、貧富の格差を拡大させ、スクォッター（公有地などに無断居住する不法占拠者）に象徴されるような都市貧困層の増大をもたらした。1978 年、スクォッター人口は市人口全体の 4 分の 1 を占めるまでになり、1980 年代を通じて、KL は「スクォッター都市」と揶揄（やゆ）されるような状況を露呈させたのである[6]。しかし、現在にあっても、エスニシティにより規定された社会地理的構造は解体されておらず、Everse のマレーシア都市社会の「階級社会」論は時期尚早であった（というよりも、この国の実態にはあわない空論に近いもの）と言わざるを得ない。しかし、一方ではエスニック別すみわけ社会であり続けながらも、他方では 1980 年代以降におけるマレーシア経済の急成長に伴う「都市中間層」あるいは「新富裕層」[7] の出現に象徴されるように、全体として社会階層間格差が拡大する、とくに同一のエスニック集団内の階層分化・階層間対立がより強化



第１図　半島マレーシアにおける都市社会構成の変動概念モデル
（藤巻正己（1990）による）

されるという状況も看取できる。

ところで、1970 年代のマレーシア、とりわけ KL 大都市地域の社会地理を考察した研究は必ずしも多くはない。1960 年代の KL の都市社会地理学的研究については、英連邦出身の地理学者で、当時、マラヤ大学で教育・研究にたずさわっていた McGee, T. G. の著作[8]が著名であるが、それらは開発政治が本格化する以前の、植民地都市的状況を色濃く残していた時代のKLを対象としたものであった。McGee がマラヤ大学から香港大学へ移籍して以降の、1970 年代における都市研究は、次世代を担う地元の地理学者たちによるものとなった。その主要な成果としては、Lee, B-T.[9]、Sidhu、M. S.[10]、Lim, H-K.[11] などの研究を思い浮かべることができる。

また、海外研究者によるマレーシア都市、とくに KL の研究事例としては、英国出身のマラヤ大学教員であった Jackson, J. C.[12]、米国の Leinbach, T. R.[13]、Aiken, S. R.[14]、オーストラリアの Johnstone, M. A.[15]、Rimmer, P. J.[16] などの研究をあげることができよう。マレーシアが旧英領植民地であり、マレーシアのアカデミック地理学が欧米など英語圏地理学の影響を強く受けてきたことが、こうした研究状況を生み出したものと考えられる。しかし、近代地理学の先発国であった西欧世界の中で、ドイツ（人文）地理学のマレーシア都市研究は、寡聞にして知らない。また、1970 年代という特定の時代に考察の対象期間を限定しているとはいえ、マレーシア全土の、村落レベルから大都市地域レベルに至るさまざまな階層に位置する集落・都市を対象にして、包括的にとらえようとしたという点においても、Kühne の著作は貴重である。

Ⅲ. Kühne の著作概要

1　Kühne の著作の章節構成

まず、以下、目次を示すことにより、Kühne の著作の内容構成を紹介しておく。

序論：1971 年以降の未解決の課題（1 ～ 16 頁）

Ⅰ章　人口の成長および空間的再配分の傾向と新たな経過形態：1970 ～ 1980 年（17 ～ 88 頁）

A.　官庁統計にみる人口成長

B.　人口の分布と再配分

a）成長地帯と成長重心―大都市圏および分散過程・重心の移動・新たな移動プロセス

b）1980 年の空間的分布図

C.　共時的社会経済的構造変化

a）農村人口の成長と雇用成長

b）都市人口の成長と雇用成長

c）「灰色の地帯」

d）経済と社会における民族的構成の変動

Ⅱ章　開発政治と都市化（89 ～ 178 頁）

A.　国家主導

a）「家族計画」―新マルサス的状況への道

b）「機会均等」の象徴、教育政治

c）1970 年以降の二つの「国家発展の主たる目標」

d）民族間・地域間融和のための調整方策としての「新経済政策」

e）「NEP」と立地理論

f）「NEP」とエコシステム

g）「NEP」と伝統

B.　国家と民間セクター

C.　都市化効果

a）農業部門からの後退

b）中心地階層の「機会均等」

Ⅲ章　変化する集落パターン（179 ～ 440 頁）

A.　村落とメトロポール間の人口過程と環境変化：従来の経験像

B.　調査地域 1―最低階層の集落型

a) サラワク州ブラガ地区クジャマン＝ラサの住居:「辺境地域におけるロングハウス」

b) サラワク州シブ農村地区ニャラの住居：都市周辺部のロングハウス

c) ケランタン州バチョック地区カンポン＝プルポック：ある海岸漁村

d) SMPG/PPG 村落 / ジョホール州ポンティアン地区プカン＝ナナス：ある大規模プランテーション集落

e) 中部パハン州の「アグロタウン」（バンダル 14）コタ＝バハン：国有大規模プランテーションの中心地

f) パハン州ジェラントゥト地区 FELDA ジェンカ 8 の「アグロタウン」: 協同組合が管理する開拓地域の中心地

g) 第一中間総括：経過の共通点と相違点

C.　調査地域Ⅱ―「中継階層」

a) ジョホール州バトゥ＝パハト地区レンギット：中継 2　秩序と副次地区中心

b) ジョホール州ポンティアン地区ポンティアン＝クチル: 中継 1　秩序と地区中心

c) ペラ州バタン=パダン地区タパ: ひとつの比較

d) サラワク州クチン：地域中心地、商業中心および工業重心

e) 第二中間総括：共通点と相違点

D.　調査地域Ⅲ:「クランバレー」大都市圏（クアラルンプル大都市圏）

a) クアラルンプル：コナベーションの核心

b) 衛星都市プタリンジャヤ

c)「問題空間」プタリンジャヤ南東縁辺部:「カンポン＝レールウェイ」の事例

d)「問題空間」プタリンジャヤ南西縁辺部の事例:「カンポン＝バクティ（カンポン＝ギネス）」

e)「成長の細胞」シャーアラム: 大都市コナベーションの連鎖における最も脆弱な関節

f) クランとポートクラン：コナベーションの海岸部における展開

g) ポートクラン：非標準的地域の東港

h) 結論：経過形態の共通点と相違点

Ⅳ章　方法と理論に関する最終的再考（441 ～ 466 頁）

A.　活動の立地条件に対して

B.　方法論的考察

a) 状況分析から過程分析：現実的正確さへの道

b) 地理学的措置：環境の記述・環境の類型化・環境描写

c)「環境描写の時間列」

C.　循環的プロセスと直線的プロセス

a) 伝統的ライフスタイルの景観的束縛に対して

b) 現代的ライフスタイルの機能的束縛に対して

c) 結論

D.「第三世界」: その脱神話化

2　概要

本書は、ドイツ地理学が得意としてきた都市（集落）階層構造論的視点から、1970 年と 80 年の『人口・住宅センサス』（マレーシア政府統計局）の比較分析と、第 3 表に整理し

たようなマレーシア各地の村落から大都市地域に至るまでのさまざまなタイプや階層の集落における現地調査などで得られた知見をもとに、マレーシアの集落地理の変動を包括的にとらえようとしたモノグラフである。

本書の主たる関心は、その後のマレーシアの行く末を強く規定したNEPが、1970年代におけるマレーシアの人口・集落分布パターンの変化や都市化に対してどのような影響を与えたのか、という点に向けられている。研究のスタイルは、センサス・データの分析を通じて系統地理学的分析を行いつつも、記述は地域地理学的であるという点に、ドイツ地理学の真骨頂をみいだすことができる。

本書を通じて、Kühneが強調した点は、以下のとおりである。

①第二次大戦後、マレーシアは、英領時代のモノカルチャ・モノエクスポート型経済下における従属的都市化と異なり、国民経済の自律的発展および新生国家建設に関わる行政機構の再編成や拡大に伴う新たな中心地の出現や発展を生み出し、農村から都市へ、低次の都市から高次の都市への人口移動を伴う都市化を経験してきた。その過程の中で、都市的集落の盛衰、階層的地位の再編がみられた。

② NEP以前に確立されていた都市階層のうち、最低次と最高次の両階層の中間に位置し、比較的中心性の高かった「中継（リレー）階層」（Relaisstufen）は、NEPあるいはブミプトラ政策の進展に伴う行政機能・システムの拡大と生産機能の付加とによって「官僚専門技術者的生産者都市（bürotechnokratischen Produzenten-städt）」という新たな地位へと上昇するようになった。このプロセスは、NEP（いいかえればブミプトラ政策）の主たる受益者である「マレー人の都市化」と連動するものであった。

③環境破壊を伴うプランテーション開発計画の一環としての「アグロタウン」（Agro-Stadt）という新たな開拓中心地の建設構想（それの理論的ベースは古典的立地論であるが）は失敗に終わり、結局、現実の人口移動・再配置は、既存の都市集落システムの「引っ張り（プル）」に強く規定されたものであった。地方農村から都市への人口の移動・集積が最も顕著であったのは、KLや衛星（der Trabant）都市のプタンリジャヤ、スランゴール州の新都シャーアラム Shah Alam、英領時代に建設された港湾都市クランKelangなどから成るKLコナベーションあるいはクランバレー大都市地域だったのである[17]。

④1960•70年代の開発途上国都市化論においては、地方農村側の人口の「押し出し（プッシュ）」が、都市の側の「引っ張り」を上回る

第3表　Kühne, D.の著書でとりあげられた調査地

集落・都市階層	事　例
最低次階層	サラワク州の2つのロングハウス集落（完全孤立型と都市周辺部立地型）、クランタン州の漁村、ジョホール州のプランテーション集落、パハン州の2つの「アグロタウン」（国有プランテーション地域の中心地と協同組合開拓地域の中心地）
中継階層	ジョホール州・ペラ州の地区中心地、サラワク州の地域中心地クチン
最高次階層	クランバレー大都市圏（クアラルンプル大都市圏：クアラルンプル、プタリンジャヤ、シャーアラム、クラン）

かたちで向都離村人口移動を促したという「擬似都市化」（Pseudo-Urbanisation）論が支配的であったことは、よく知られている。しかし、1970年代におけるマレーシアの都市社会変動の実態分析からは、そうした都市化論は適用できない。むしろ、NEPの施行に伴う経済的行政的教育的諸要因が複合する、都市の側の「引っ張り」要因が強く作用し、地区中心・地方中心そして大都市へのマレー人の集中を招いた。

⑤つまり、1970年代におけるマレーシアの都市社会変動、都市化過程の主たる推進力は、国家の社会経済構造を再編することを目的としたNEPであったが、それの地理的、空間的結果として、一方で地方における都市（的集落）の階層変動、他方でKLを頂点とした既存の都市システムのプライマシィが強化された。また、このような都市的趨勢は、NEPがマレー人の社会経済的地位を高めることを企図したブミプトラ政策を内包するものであったため、都市の「マレー化」（malailischer）を促し、華人都市あるいは移民都市的様相が濃かったマレーシアの都市社会地理を変質させることとなった。

なお、本書は、マレーシアという一国の都市化状況、それに伴う社会経済変動に関する考察を通じて、大規模な土地開発やモータリゼーションなどに象徴されるような「技術主義」をベースにした「開発と変化」・「直線的進歩」を至上とするイデオロギー（藤巻注：モダニズムあるいは開発経済論）が、マレーシアという伝統的社会にみられた人間社会と環境との持続的均衡、つまり「循環的環境」にもたらすであろう弊害についても言及している。そして、「技術主義」の立場でみた場合、「循環的社会は後進的」であり、「直線的社会は進歩的」であるという思想が、「第三世界（Dritte Welt）」の開発論において信奉されているが、こうした一面的な見方を「脱神話化（entmythologisiert）」することが地理学研究に求められるべきことを主張している。

次章では、筆者がとくに関心を抱いている1970年代クアラルンプルの社会地理に関わる記述（第3章D節「調査地域Ⅲ：クランバレー大都市圏（クアラルンプル大都市圏）」（Untersuchungsbereich III – Metropolitaner Ballungsraum “Kelang Valley”（Grosraum Kuala Lumpur）の中の「a）クアラルンプル：コナベーションの核心」（a）Kuala Lumpur: Kern der Konurbation : 361 ～ 373頁）について、その抄訳と、付図「クアラルンプルの民族・社会空間構成：1980年」（Kuala Lumpur Ethnische und Sozialräumliche Gliederung 1980）の検討を試みる。なお、本文中にとりあげられる諸地区の位置などについては第2・3図を、また、居住地区の社会階層を示すカテゴリー「1」～「5」などの符号が記載されているが、その詳細については次章の第2節を参照されたい。

Ⅳ. Kühneによる1970年代クアラルンプル大都市地域の社会地理学

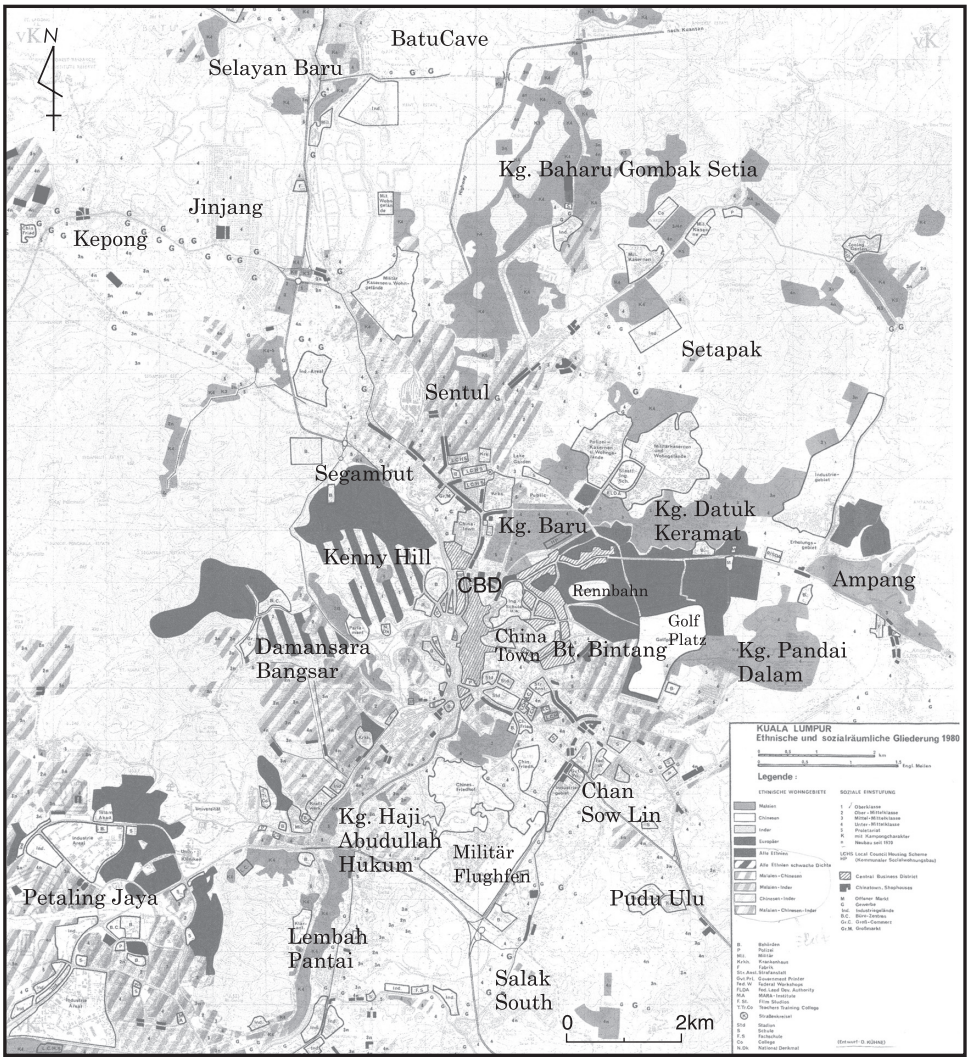
1 「クアラルンプル：コナベーションの核心」抄訳

連邦直轄領（Bundesterritorium：マレーシア語で*Wilayah Persekutuan*）面積：243 km^2、人口（1980年）：91万9610人、内、マレー人（Malaien）：30万5435人、華人（Chinesen）：47万7601人、インド系（Inder）：12万7793

人、その他（Sonstige）：8781 人。調査研究期間：1981 年 3 月～ 5 月。

KL は、1970 年、スランゴール州の自治体であったが、1974年には連邦直轄領に昇格した。この 10 年の間に KL の人口は爆発的に増加している。1970 年には総人口 45 万 1810 人であったが、80 年には 91 万 9610 人へと 2. 04 倍増した。中でも、華人が 1. 93 倍増（比率は 54. 8%から51. 9%へと減少）、インド系が1. 52 倍増（比率は 18. 6%から 13. 9%へと減少）したのに対して、マレー人は 11 万 3642 人から 30 万 5435 人へと 2. 69 倍増し、KL に占める人口比も 25. 1%から 33. 2%へと急増した。つまり、首都の「マレー化」（malailischer）がみられた。

KL の人口増は、行政域の拡張だけでなく、



第 2 図　クアラルンプル概観図：1980 年
（Kühne D. 作図「クアラルンプルの民族・社会空間構成：1980 年」にもとづく）

住宅地区の過密化によるものでもあった。なお、スランゴール州内でも、首都と関係の深い周辺ベルト地帯（Außengürtel）の発展もあった。

注目すべきは、1970 年当時、KL では「プロレタリアート」や「下中層」のような下位の階層（unteren Strata）での異民族集団間の混住はみられなかったが、1980 年センサスの結果から、あらゆる社会階層（sozialen Ebenen）にわたって、異民族集団間、特にマレー人と中国人の広範囲におよぶ空間的な民族的混住（räumlich Verschränkung der Ethnien）が、この 10 年間に進んだことが明らかとなった。

同様のことは、北部のスントゥール Sentul とスタパック Setapak の居住地域においても見られる。スタパックの広大な錫採掘地域跡は、かつて純然たる移民華人の居住地域であり、スクォッターによる一時的居住地域（Squatterprovisorien）であった。1970 年以来、警察・軍隊用地付近からマレー系の「不法占拠地」（*tanah haram*）化が始まり、そして古くからの華人系不法占拠地域（Squattergebiete）への UMNO を支持するマレー人の流入が始まった[18]。こうしたマレー人たちは小市民的（kleinbürgerlichen）特性を帯びていた。マレー人の流入により、この旧華人地域は必ずしも減退せず、むしろ華人の流入もみられ、華人やインド系住民とマレー人（公務員宿舎）の混住（Durchmischung）現象が各地で生じた。この地域における集落は、外観上、「K4：カンポン（*kampung*：マレーシア語で「村」）的特性を帯びた下中層」（Unter-Mittelklasse, mit Kampong-charakter）的社会空間（sozial Räumlich）を示しており、新たなスクォッター地区化の兆しを見せている。この広大な平坦地では、以前は「カテゴリー5」（プロレタリアート：Proletariat）の居住地区であったのが、「4」（下中層）に格上げされた地区もある。また、かつて「4」レベルの華人居住区が「3」（中中層：Mittel-Mittelklasse）になる場合もみられる。これらの居住地域の階層上昇は、近傍における湖畔公園の造成によるものである。

スントゥールは、労働者住宅地区（Arbeiterwohngebiet）が配列された、鉄道工場の周辺地域にあたる。この地域でもマレー人（という「種子（Einsaat）」）の流入が見られる。この現象は、マレー人の公営低価格住宅（Billig-Wohnblöcken）や公務員宿舎への入居に伴うものであるが、かつてこの地域は小さくまとまったインド系の鉄道員宿舎があったところである。こうしたマレー人の流入は次第にスントゥールを「民族的弾薬箱」（ethnischen Caissons）[19] の状況にしている。

他の古い地域の発展については、以下のような点が注目される。スガンブット Segambut 地区では、首都高速道路のクチン通り Jalan Kuching 西部に、マレー人とインド系住民（タミル人およびシーク教徒）が移住したが、分離居住しあっている。首都高速道路の東側は中国人の卓越する工業地域で、新しい住宅団地（Wohnpark）（「4」・「3」）に隣接している。ここではマレー系不法占拠地（*tanah haram*）の発達はみられない。

KL 西方のケニー= ヒル Kenny Hill では、クチン通りに接する極めて新しいスクォッター島（Squatterinseln）がみられる。そこにはインド系（「5」）、インドネシア人（Indonesiern）[20]（「5」）そしてマレー人（「4」）が居住していた。今日ここには「2」（上中層：

Ober-Mittelklasse）・「1」（上層：Oberklasse））の高級住宅地域になっており、すべての民族の混住が確認されるが、マレー人の流入がもっとも顕著である。また、2 つの新しい政府機関の合同庁舎と 2 つの新しい豪奢な住宅地域もみられる。国会議事堂の西側はかつてマレー人と華人の公務員地区であったが、今日、マレー人地区（「2」と「3」の混住）となっている。全体にこの地域は、植民地期の古いバンガロータイプの住宅（die kolonialen Bungalows：庭付き一戸建て住居）が消え、ムーア風（Moorish stile）などの様式を備えた新築の住宅地域に変わりつつある。

さらに西部のダマンサーラ = ハイツ Damansara Heights と南西部のバンサー=パーク Bangsar Park は、1970 年以降に形成されたカテゴリー「4」～「1」の居住地である。この地域は市街地から到達可能な位置にあるが、しかし中心部から離れた City-Ferne であり、オフィス本社や企業本社が立地し空間利益を得ている。なお、この地区は全くの多民族混住地域である。

南部、とりわけクラン河谷（とくに Kg. Pantai）は、今なお「民族的弾薬箱」である。この地域は、密度の高い集落帯（Siedlungsband）が位置しており、インド（indischer）系スクォッター地区に一部マレー人が居住している（Kg. Haji Abdullah Hukum）[21]。この地域は洪水常襲地帯であり、仮住まい的「5」の地区（藤巻注：スクォッター地区）としての性格を有し、長期に住む者の少ない「通過駅」（Durchgangsstation）の様相を示している。「K4」（カンポン的特性を帯びた下中層）の特性をもつルンバー = パンタイ Lembah Pantai は洪水常襲地帯にある。ここには公営の高層住宅（Wohnhochhäusern）も含まれる。マレー人にとって高層住宅という居住形態は、1970 年ころには想像もつかなかったかもしれない新たなものだが、今日では次第に普及しつつある。

南東部のサラク = サウス Salak South とプドゥー = ウル Pudu Ulu との間の、かつての錫採掘地域、とくに軍用飛行場の東側にはスクォッター地域（「4」）が広がっているが、それだけではなく、小・中市民向けの数多くの新興住宅地（neue Wohnparks）が出現している。

近年、東部縁辺部で、急速な住宅地化が進行している。南部のカンポン=パンダン=ダーラム Kg. Pandan Dalam はマレー系の住宅地域（Malaien-Wohngebiets）である。このマレー人住宅地域とは明瞭に分離して、かつての錫採掘地にはインド系住民と華人の混住地域が広がっている（「5」・「4」）。ゴルフ場とアンパン Ampang 地区との間の錫採掘地帯では興味深いプロセスが生じている。すなわち西部の不法占拠地（*tanah haram*）と UMNO-Land[22] ではマレー人地域が拡大しつつある。東部ではアンパンとカンポン = パンダン = ダーラムからプドゥー = ウルに至る地域は中国人地域となる。同地域ではスクォッターの侵入も伴うが、必ずしも「悲惨な地区（Elendsquartiere）」ではない。ここには民族的混じりあい（ethnischer Durchmischung）の兆候はどこにもみられない。

アンパンは 1970 年以来、アンパン通りをはさんで南西地区と南東地区とに分けられるが、両地区とも新興の住宅地帯（Neusiedlungszonen）であり、また純粋に中国人地域でもある。社会階層は「4」（下中層）だが、スクォッター集落（Squattersiedlungen）はみられない。アンケートによれば、住民は決して「苦力」（Coolie）で

はなく、熟練労働者あるいは比較的高収入の労働者から成る。そのことが住民の社会水準を規定している。両地域には零細工場が分布し、周辺部には野菜の栽培地がみられる。五脚基（ゴカキ）（Shophouse-Arkaden、藤巻注：棟割長屋形式の店舗兼用住宅である店屋が雁木状に連なる通路）街が旧集落から南に伸び、中心地としての景観をみせている。5 階建ての警察官宿舎があり、そこにはマレー人が集住する。アンパン通りの北側には古い錫の採掘池の間にマレー人の集落（大部分が「4」）が広がる。住民のほとんどが KL への通勤者である。野蛮な不法占拠者（wilden (*tanah haram*-) Siedler）は、公営住宅（Aozialwohnungen）に再定住されるべきである。なお西部には近年、新規移住者（Neuankömmlinge）のマレー人やインドネシア人出稼ぎ労働者（indonesische Gastarbeiter）の流入が見られる。北部のアンパン = ジャヤ Ampang Jaya は新興住宅地（「2」）であり、ほぼマレー人が住むが、一部インド系住民や中国人も見られる。

外帯（周辺ベルト地帯）は連邦直轄領に属さないが、ダトゥ = クラマットからはマレー人の住む新しい住宅地（1970 年以降に成立した中中層および下中層向け新興住宅地区「3n」・「4n」、あるいは「k3」・「k4」）が連なっている。その南側には数キロメートルに及ぶ新興工業地域や中国人中層の新興住宅地域が広がる。かつての華人とインド系のスクォッター地域には、公社の RISDA（ゴム産業小農開発庁）や保養公園（Erholungspark）が位置する。

カンポン = バル = ゴンバック = スティア Kg. Baharu Gombak Setia は、スタパックから数キロ北、ゴンバック通りの東側に位置するが、そこでは現在、新たな現象が起きている。ここ10年ほどの間に快適なマレー人の公務員宿舎集落（Beamtensiedlung）や、その北には富裕層（Güteklasse）向けの新興高級住宅地区ができている。その背後には、小さなプランテーション農園が広がっている。また UMNO からの組織的な援助により、現在、多数のマレー系不法占拠者（*tanah haram*-Siedler）が、以前からのスクォッターと結びつくかたちで居住している。これらのマレー人移入者は、西部および東部のマラッカ海峡沿岸諸州からの出身者であり、軍人、教師などが大部分である。持ち家を取得した場合、現在の住居を新規移住者に賃貸する者もいる。住民アンケートによれば、「失業者」「不完全雇用者」は皆無であった。

ゴンバック川の近くには古くからのカンポン（Kg. Padan Balang, Kg. Changat, Kg. Kerdas, Kg. Simpang Tiga など）があった。これらの集落は、今なおカンポン的環境（Kampongmilieu）を残しているが、もはや稲作をしていない。しかし、ずっと昔からのように菜園を耕作している。

鍾乳洞で有名なバトゥ = ケーブ Bata Caves 近く、かつての錫採掘地域に広がる、イポー Ipoh に向かう幹線道路沿いのスラヤン = バル Selayang Baru は、まったく新しい（*baru*）住宅―工業地区である。かつて、中国人がかかわる工場が多数分布し、わずかだがインド系の住居と田舎の様相を帯びた（mit dörflichem Einschlag）マレー人労働者のコロニー（Arbeiterkolonien、例：Kg. Pak Karim, Kg. Selayang）があった。しかし、近年、またたくまに大きく変化した。すべての民族が移入するようになり、小市民的特色（kleinbürg-

erlichen Kolorits）が卓越する新興住宅地域や工場の郊外発展（Suburban-Entwicklungen）をみるに至ったのである。こうした地域的変化に伴う現象として、インド系住民と華人が混住するスクォッター＝コロニーが発生するようになった。また、マレー人が多く住むようになる一方、熟練労働者やサラリーマンなどの一般勤労者が住むようなった。彼らの大部分は KL への通勤者である。

ケポン Kepong には、注目すべき 2 つの新しい住宅衛星地区（Wohntradanten）がある。ひとつは、郊外型（Suburban-Stil）の官僚的環境（Bürokratenmilieu）を帯びた華人卓越地区（「4」・「3」）であり、もう一つは、多民族的で、同種の階層が集住する社会空間的地区だが、とくにマレー人公務員の流入がみられるようになった。

スラヤンでは、副都心開発が始まりつつあり、最近は KL への通勤者のベッドタウン（Pendler-“Schlafstädte”）と化している。ケポン通り沿いには新興の工場地帯が広がっている。首都に連絡する幹線道路の建設も始まっている。周辺地域では、新しいごみごみしたスクォッター地域が生まれ始めている。

首都は 1970 年来、いちじるしく変貌をとげてきている。かつての都市内スクォッター地域（die innerstädtischen Squatterquartiere）は消失し、代わりに巨大な官庁集合ビル（Behördenkomplexe）と、それらを縁取るように緑地帯（Grünflächen）や幅広の自動車道が建設されるようになった。かつてのチャイナタウンには銀行、事務所ビルが建っている。そして新都心（neue CBD）が形成されつつある。それはアンパン通りと都心を避けて通るための環状線（Innenstadt-Umgehungsring）、すなわちプクリリン Pekeliling 通り（藤巻注：現在のトゥン＝ラザク通り Jalan Tun Razak）に至る空間においてである。またブキット＝ビンタン Bukit Bintang 地区やインビー Imbi 地区の表通りでも、高級ホテル、大企業のオフィス、デパート（Plaza）、高級レストラン、ショッピングアーケード、ファーストフード店などがそろった地域となりつつある。

プラザには自動車販売店から貴金属店、テーラー、ディスカウント店、ファーストフード店、ビアガーデン、ビリヤード場に至るまで多種多様な店舗が入っている。これらはメトロポールの大いなる魅力である。ハリラヤ（*Hari Raya*：ムスリムの断食月明けの祭日）前や中国正月の季節ともなれば、プラザの熱気は高まり、電力消費量、飾りつけ、売上高のいずれもがピークに達する。大衆の購買意欲は西洋諸国のそれに比肩するほどに膨れ上がる。夕方のレストラン、カフェテリア、映画館、ボーリング場は人であふれかえる。「日曜日の客」（Sonntagspublikum）が、大きなホテルのカクテルラウンジに集まる。こうして KL でも、大量の余暇時間（Massenfreizeit）や消費民主化（Konsumdemokratisierung）が現実のものとなりつつあり、KL ではもっとも濃密な「都会生活（urbane Leben）」が醸成されている。そして、さらにそれが、もっと濃密になる潜在力を秘めている。大都会 KL の官僚機構の拡大（Bürokratisierung）や工業化は、いやおうなしに人々の生活様式（Lebensformen）と行動様式（Verhaltenformen）の変化を求める。「刺激の循環」（Kreislauf der Impulse）は、KL に成長のエネルギーを膨らませている。

プドゥー～ブキット＝ビンタン～インビー

の区間（KL の中心部、新 CBD 再開発地域）は、官庁・高層オフィス複合ビルを建築するための、広大で平坦な更地になっている。それまでインビーとブキット＝ビンタン通りの間には、地元住民曰く、映画館街があるとともに、長い歴史をもつスクォッター地域が広がっていたが、1981 年に、スクォッター地区は撤去されたという。

その界隈から 1 km ほどのところにプドゥー刑務所があるが、その付近の巨大な華人・インド系のスクォッター集積地区（Squatteragglomerat）が1970年夏に撤去され、住民はショウ通り Jalan Shaw（藤巻注：現在のハン＝トゥア通り Jalan Hang Tua）に建設された KL 市営住宅（1 ～ 3 部屋＋台所＋浴室付。小さな住居の場合月額 M$46、中規模で M$58 の家賃）に再定住した。隣接の高層住宅（Wohntürmen）には、すでに華人が多数住み着いているが、新たな公営住宅にはマレー人とインド系住民が入居している。新入居者の世帯主はいずれも下級公務員である。それらの家族はまだ若く、子沢山である。したがって子供が大きくなれば、現在の住居は手狭になるという問題をかかえている。にもかかわらず一度入居すれば当分の間、そこにとどまる傾向がある。ある住民は、すでに 7 年間住み続けているという。隣接の華人向けの多数の新規アパート（4 ～ 5 階建て）は既婚者向け住宅である。1970 年には、まだ雑然としたスクォッター地域（Squattergebiet）が広がっていたが、現在はそうした光景は見られない。

以上とは反対に、競馬場の北西、クラン川の向こう岸に位置するカンポン＝バル Kg. Baru は、生活環境の悪化（Mileuverschlechterung）を示す事例である。カンポンバルは、KL の只中にある最も古い、マレー人だけの居住区（Wohnbezierk）である（藤巻注：同地区はマレー人保留地）。かつては環境良好な庭園都市（Gartenstadt）だったが（カテゴリー「3」・「2」）、今やその生活環境は悪化している。アンケート結果によれば、良好な生活環境を維持するための経済的負担が大きくなりすぎたため、この良好な住宅地区に古くから住んでいた住民は転出するようになったという。空き家は、同じく移住してくるマレー人（「4」）に賃貸するか、アパート、寄宿舎に建て替えて収入を得る者がいる。新住民は、この居住区に長期居住する傾向をみせない。カンポン＝バルは庭園都市としての性格を自ら閉ざす方向か、あるいは土地に定着しない住民による「プロレタリアート化（Proletarisierung）」の方向、いいかえれば、環境の悪化（Vere-lendung Milieu）、社会的荒廃（sozialer Vere-lendung）へと変化しつつある[23]。

ところで、KL は 1970 年以来、深刻な問題を経験してきた。高度なモータリゼーションと膨大なごみの問題が生活環境を悪化させてしまったのである。交通に関しては、特にラッシュアワー時においては、交通量の増大が、あらゆるところで渋滞等を引き起こし、大いに都市の機能を麻痺させてしまっている。「使い捨て社会（Wegwerfgesellschaft）」を反映して、大量廃棄物処理をめぐる問題（Massenmüll-Problem）も深刻であり、ゴミ回収施設の建設が急務となっている。また、水道・電力体系の整備も求められている。

こうして 1970 年以来、KL は「官僚専門技術者的生産者都市」（bürotechnokratischen

Produzentenstadt）に変貌をとげた。現代化プロセスの進行に伴い、これからの 10 年以内に、その求心力により KL 人口は倍加し、居住地の密度は増し、その面積は拡大するだろう。連邦直轄領の範域は非現実的なものとなり、都市有機体（Stadtorganismus）としての大都会 KL は、領域を超え、拡大するだろう。KL への巨大な人口流入に歩調をあわせて、建設・住宅の取り壊しが進んでいる。スクォッター地区の減退がその証左である。民族の空間的交差（die räumliche Verschränkung der Ethnien）は今なお、しかもすべての階層にわたり継続している。こうして、今日の KL に対して、「擬似都市化（Pseudo-Urbanisation）」の神話をみいだすことはできない。しかし、KL は別の問題に直面している。都市建設の過剰発達（städtebaulichen Hypertrophien）に伴い、大量輸送、大量消費、現代的大量居住（Massen-wohnen）に伴う諸問題が表面化しているのである。

2　社会地図

1）概観　本書には「クアラルンプルの民族・社会空間構成：1980 年」（Kuala Lumpur Ethnische und sozialräumliche Gliederung 1980）というカラー刷りの地図（縦 85 cm ×横 28 cm）が付されている（第 2 図参照）。同図には第 4 表に示した社会地理的情報が盛り込まれており、この図 1 枚から 1980 年センサス当時のクアラルンプルの社会地理的状況、たとえば民族集団・社会階層特性、主要施設の分布状況など、1980 年代に本格化する大改造前の地理情報を読み取ることができる。こうした 1970 年代 KL の社会地理的状況を総合的に描出した地図的表現は類例をみない。

同図には、DBKL（Dewan Bandaraya Kuala Lumpur：クアラルンプル市庁）行政域のほかに、隣接するスランゴール州のいくつかの行政域（郡：プタリン Petaling、ゴンバック、ウル＝ランガット Ulu Langat）の一部も含まれているが、KL と一体化したコナベーション地域の中核部分が示されているといってよい。以下、同図から読み取れることがらについて、概要をまとめてみよう。

旧市街地では、クラン川とゴンバック川とが合流する歴史的コアを中心に CBD とチャイナタウンが広がり、幹線道路沿いには

第 4 表　Kühne 作図「クアラルンプルの民族・社会空間構造：1980 年」の主な凡例

指　　標	分類名称	表記形式
民族集団別居住地区	マレー人、華人、インド系、ヨーロッパ人、全民族、マレー人 / 華人、マレー人 / インド系、華人 / インド系、マレー人 / 華人 / インド系	当該地区で卓越している民族集団の分布状況を色別描画
社会等級分類、その他社会地区特性	1：上層、2：上中層、3：中中層、4：下中層、5：プロレタリアート	当該地区で卓越している階層を数字にて表記
	K：カンポン的特性を帯びた居住地区、n：1970 年以降の新興住宅地区	当該地区で卓越している社会地区を記号表記
その他地区および施設	CBD、チャイナタウンおよびショップハウス	ハッチ表記
	M：露天市、G：商業地区、Ind.：工業地区、B.：官庁、P：警察、M：軍隊、Krkh.：病院、F：工場、S：学校、F.St.：映画撮影所、F.S：専門学校、Co：カレッジ、LCHS：公営住宅…．ほか	当該地区で卓越している施設を記号表記

ショップハウス（店屋）街が伸びるという、旧植民地時代の「華人都市」的景観が存続していることがうかがえる。CBD 以外の各所には、各種政府・行政機関や軍関連施設の配置がみられる。それは、国家首都としての機能拡充の空間的結果であることは言うまでもないが、こうした施設こそが「マレー人の都市化」の受け皿となったのである。また、市街地縁辺部各地には、工業地区の配置も見られる。

他方、郊外においてはどのような景観がみられたのであろうか。1974 年に KL は連邦直轄領へ昇格するに伴い、行政域の拡大があり（スランゴール州都としての機能は、南西郊外に新たに建設されたシャーアラムに移転）、新たに KL の行政域に組み込まれた地域（郊外）には、北部や南部で錫の採掘地（廃坑も含む）や、北東部・西部ではゴム・油やしのプランテーション＝エステートが広がるという景観が広がるとともに、多数のスクォッター集落の簇生（そうせい）もみられた。1980 年代以降、これらの郊外地域（たとえば西部のダマンサーラ、北東部のワンサ＝マジュウ Wangsa Maju にあたるプランテーション農園地域）は、後年、大規模なニュータウンや住宅・工場団地の開発予定地に供されることになるのだが、同図は、それ以前の状況を表したものとなっている。

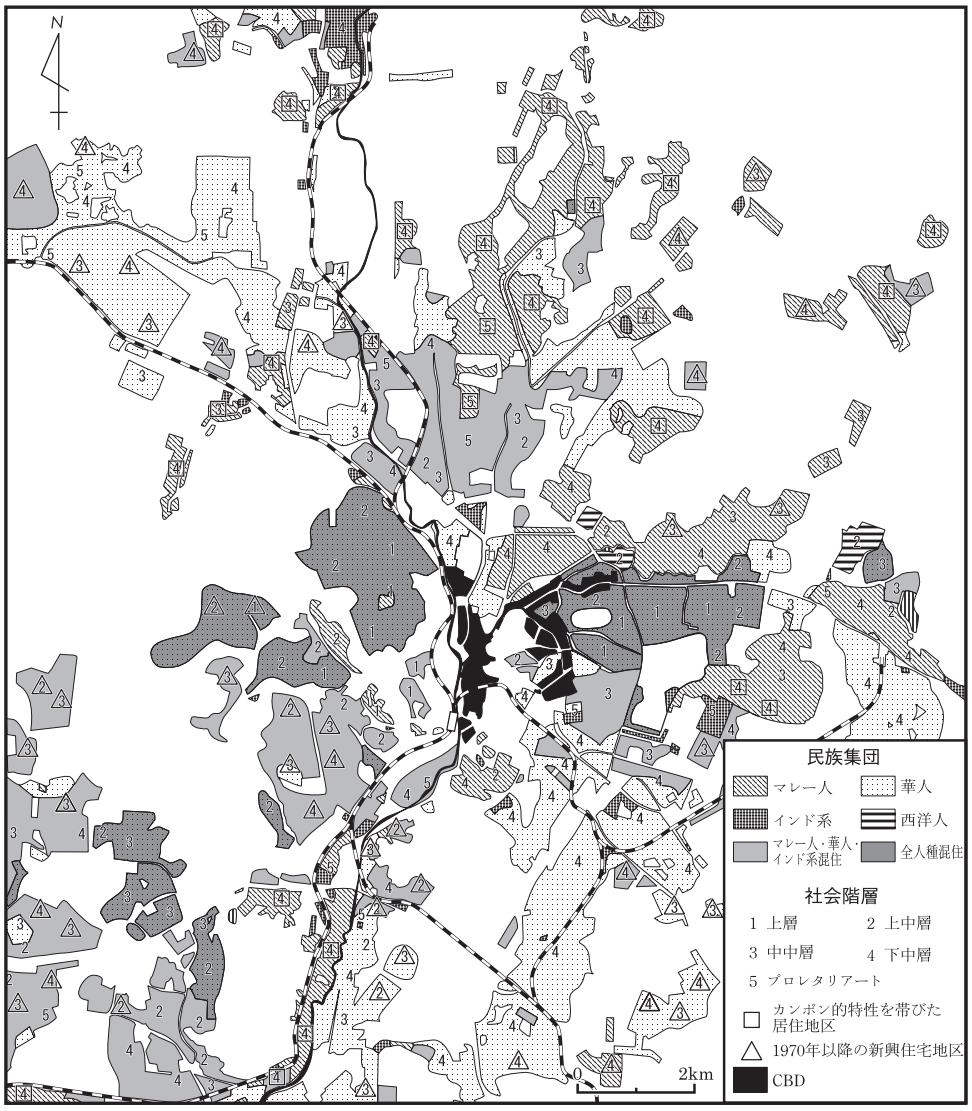
ところで第 3 図は、第 2 図「クアラルンプルの民族・社会空間構成：1980 年」から、主にエスニック集団および社会階層に関する情報を抜き出したものである。同図をもとに、当時の KL の社会地理的状況がどのように読み取れるか、抄訳のまとめを兼ねて以下に粗描してみたい。

2) エスニック集団別すみわけ状況　Kühne は、民族別居住地区を「マレー人（Malaien）」、「華人（Chinesen）」、「インド系（Inder）」、「ヨーロッパ人（Europäer）」、「全民族（Alle Ethnien）」、「全民族（軽度：Alle Ethnien schwache Dichte）」、「マレー人 － 華人混住（Malaien-Chinesen）」、「マレー人 － インド系混住（Malaien-Inder）」、「華人－インド系混住（Chinesen-Inder）」、「マレー人 － 華人 － インド系混住（Malaien-Chinesen-Inder）」に 10 分類し、精緻な地図表現を試みている。しかし、ここでは煩雑さを避けるために、「マレー人」、「華人」、「インド系」、「ヨーロッパ人」、「全民族（軽度も含む）」、「マレー人－華人－インド系混住」の 6 分類に再構成し、あらためて検討を加えてみる。

Lee, B-T[24] は 1974 年の連邦直轄領昇格前の1970年センサスをもとにエスニック集団別すみわけ状況をセンサス統計区ベースで表しているが、それと比べたとき、旧市域に関する限り、基本的パターンに変化はみられない。すなわち、中心市街地のチャイナタウンから東南方向に伸びるプドゥ、錫採掘地域であったチャン＝ソウ＝リン Chan Sow Lin は明瞭な華人卓越地域として残存している。英領時代に設定されたマレー人保留地区であるカンポン＝バルとカンポン＝ダトゥ＝クラマットは、その土地の性格上、マレー人地区として継承されており、南西部のカンポン＝ハジ＝アブドゥッラー＝フックムなど植民地期に形成された古いマレー系集落（カンポン：*kampung*）もマレー人新規移住者の受け皿となっている。インド系居住地区の場合は、それ自体の人口数が少ないため、インド系卓越地区の析出は困難だが、北部のスントゥール、南西部のバンサー、東部のパンダンなどにおいて、

マレー系や華人と混住しながら相対的にインド系色の強い地区をみてとることができる。混住地区は、各エスニック集団卓越地区間に介在するかたちで、広く分布している。

またこのほかに、各国大使館が集まるアンパン通り沿い、旧競馬場（現在は、その跡地にペトロナス＝ツインタワーを中心とした新都心の KL シティセンターが建設されつつある）やゴルフ場（Royal Selangor Golf Club）の周辺には、ヨーロッパ人地区やすべてのエスニック集団の混住地区をみいだすことができる。これらの地域に加えて、英領時代にはイギリス人や上層の住宅地域として開発された旧市街地西の丘陵地帯や高級住宅地域ブキッ



第 3 図　クアラルンプルの社会階層別 / 民族集団別すみわけ状況：1980 年
（Kühne, D. 作図「クアラルンプルの民族・社会空間構成：1980 年」をもとに作成。近藤暁夫作図）

ト＝トゥンクーBukit Tenku、さらに競馬場やロイヤル＝スランゴール＝ゴルフクラブ隣接地域も、すべての人種・エスニック集団混住地区として継承されている。これらの地域は、いずれも上層・上中層居住地域であることに注意を要したい。

1974年の行政域の拡大により、市街地北部郊外のスタパックのマレー人集住地域、北西部の旧「新村」ジンジャン Jinjang やケポン、南部のサラク＝サウスの華人集住地域が、新KL市域に含まれることになったが、旧市街地と同様に郊外もエスニック集団別すみわけ状況を明瞭に残すものであった。こうして70年以降の人口流入があったとしても、新規流入者の転入先は各エスニック集団の集住地であったろうし、何よりも英領マラヤ時代以来存続しつづけてきたマレー人保留地の存在は、この街の民族集団別すみわけを制度的構造的に規定するものにほかならなかったからである。また、住民の立退きを伴う市街地人口の分布をも変動させる植民地都市的空間の大改造が本格化するのは、80年代半ば以降であったからでもある[25)]。

しかし、マレー人の増加、連邦直轄領への昇格に伴う行政域の拡大、市街地の拡大、居住地域の郊外化といった一連の社会変動は、明らかに1970年センサス当時におけるKLとは異質な都市社会空間を生産した。一方では、既存のマレー人地区における人口密度の上昇や郊外におけるスクォッター集落の拡大、他方では、郊外、とくに新興住宅地域への華人の流入といった現象がみられるようになったのである。

3）社会階層別すみわけ状況　Kühneは、社会階層（社会等級分類 : Soziale Einstufung）については、「上層」(Oberklasse)、「上中層（Ober-Mittelklasse)」、「中中層（Mittel-Mittelklasse)」、「中下層（Unter-Mittelklasse)」、「プロレタリアート（Proletariat)」という5つの階層に分類している。「プロレタリアート」とは、「無産（労働者）階級」にほかならないが、KLの場合、建設・工場労働者などに加えて、自営の行商人・露天商・屋台商・小販などから成る多種多様な雑業部門の存在を含めて考えれば、より一般的な分類表現として「下中層」の下位の階層である「下層」(Unterklasse）の方が適切であろう[26)]。また当時の雑業部門に従事していた大衆の間で「プロレタリアート」という明確な階級意識なるものが醸成されていたかどうかも疑わしい[27)]。

さらにKühneは以上の5階層のほかに「カンポン的特性を帯びた居住地区」(mit Kampongcharakter）と「1970年以降の新興住宅地区（Neubau seit 1970）」という景観的特徴をはらんだ社会地区をも、社会階層の区分に加えている点は興味深い。いずれも、居住形態（景観）が住民の階層を反映するものであり、KL の現代都市化の空間的表象と映ったからではなかろうか。また、これらの地区が当時の KL の社会階層の地理的分布あるいは社会階層別セグリゲーションの解釈の際、Kühneの心象風景に刻印された印象深い景観的要素であったということであろう。

すなわち、「1970年以降の新興住宅地区」は急増する KL 人口、とりわけ中層以上向けの計画的開発による郊外住宅地区であることはあらためて述べるまでもない。他方、「カンポン的特性を帯びた地区」とは、村（*kampung*）的景観がみられる地区という意味であるが、Kühneがこうした特性をもつ地区を社会階層

分類に加えたのは、急速に都市化を経験している KL に、村的要素を並存させる開発途上国都市共通の地理的表象を見出すとともに、それが、KL の社会階層を考察する上で「上層～下層」という従来の分類の仕方とは異なる「住まい方」あるいは「生活様式」からみた社会階層論的解釈の有意性を感じとったからではなかろうか。なお、その記号表記がマレー人集住地域にのみ表記されていることから、「カンポン的特性を帯びた地区」とは、高床式木造住居が集まるマレー＝カンポンのみを指すものであると理解できる。しかし、現在でも依然としてカンポンの雰囲気を残しているマレー人保留地のカンポン＝バルやカンポン＝ダトゥ＝クラマットは「カンポン的特性を帯びた地区」として分類されていないのに対して、1990 年代までスクォッター地域であった北郊のマレー人集落群や南西部の鉄道沿線に伸びるカンポン=ハジ=アブドゥッラー＝フックムが「カンポン的特性を帯びた地区」として分類されていることから、「カンポン的特性を帯びた地区」とは、事実上、マレー人の自然発生的スクォッター集落を指すものと解される。

以上に関連して言えば、1970 年代から 80 年代にかけての KL は、「スクォッター都市」と揶揄されるほどの状況を露呈させていたが[28]、Kühne の地図では、「スクォッター地区」に関わる分類指標はない。抄訳文にも見られるように、Kühne 自身も KL の「スクォッター地域」（Squattergebiet）・「〃地区」（-quartier, -bezirk）、「〃孤立島」（-inseln）、「〃コロニー」（-kolonie）について言及してはいるが、「スクォッター地区」が地図表現的要素として盛り込まれていないのは奇異である。Kühne の調査研究以前、すでに KL では本格的なスクォッター一斉調査が試みられ、空中写真撮影にもとづいてスクォッター集落の分布図が作成されているが[29]、それと Kühne の地図とを重ね合わせてみれば、エスニック集団の別に関わりなく「5」（プロレタリアート）と表記されている地域や、「K4」（カンポン的特性を帯びた地区＋下中層居住地区）と示されている地域が、ほぼスクォッター地区と重なっていることがわかる。ちなみに、Kühne は、抄訳文にあるように、「KL への巨大な人口流入に歩調をあわせて、建設・住宅の取り壊しが進んでいる。スクォッター地区の減退がその証左である」と、あたかも KL のスクォッター地区が解体されつつあるかのように述べているが、その後の実態は様相を大きく異にするものであった。1980 ～ 90 年代を通して、KL は「スクォッター都市」だったからである。

ところで、同図から、バージェス的（同心円状の）、ホイト的（セクター状の）空間的規則性を帯びた社会階層構造をみいだすことは困難である。上層および上中層集住地区の凝集を、植民地都市時代に形成された西方丘陵地区や旧競馬場やゴルフクラブ付近でみいだすことができるし、郊外においては「1970 年以降の新興住宅地域」と「カンポン的特性を帯びた地区」や「プロレタリアート」地区（藤巻注：スクォッター地区）の並存的発達をみいだすことができるが、その他の階層の分布パターンは明瞭ではなく、中層・下層居住地域が混在するという状況が読み取れる。これは、KL の包括的都市計画の整備や住宅市場の計画的発展よりも、人口の急増が先行したことを物語っている。ここで筆者は、名著『東

南アジアの都市―東南アジアのプライメイトシティの社会地理―』(1967 年)[30] においてMcGee が提示した東南アジア都市構造モデル図を想起する。McGee は、港湾機能を有す旧植民地都市起源の東南アジア都市の空間構造をモデル化したのであるが、当時の東南アジア都市は、植民地時代に形成された港湾機能を有す地区やチャイナタウン、そして CBD を核とする市街地中心部付近には上層および中層が居住し、郊外には下層(あるいはスクォッター)地区と中層向け新興住宅団地(ニュータウン)が並存するという、先進工業国の都市構造とは異質な社会地区の分布が析出、表現されている。KL は臨海港湾都市ではないが、それに関わる空間的要素をはぶいてみれば、おおよそ McGee のモデル図は、1970 年代の KL についても適用できる。

こうして、1970 年代末、1980 年における KL の社会地理は、大規模都市改造プロジェクトとそのための本格的な都市計画の実施以前の、旧植民地首都から近代的国家首都、さらに周辺的世界都市への過渡的状況を露呈していたものと解すことができる。

V. おわりに

以上、本稿では、Kühne による著作の紹介と検討を通して、1970 年代のマレーシアの都市化過程の特徴、とりわけ KL 大都市地域における社会地理的変化について考察を行った。

最後に、本書の特色や問題点について若干、印象めいたことがらを略記しておきたい。まず、記述上の特色としては、ドイツの伝統的地理学(あるいは素朴実証主義的地理学)の影響を継承しており、生理学的・人間生態学的みかたが散見され、記述は地域地理学的である。

第二に、伝統的ドイツ地理学の特長をよく表している点として、地図表現の精密さを高く評価したい。本書には多くの頁に数多くの地図を挿入している上に、幾枚かの都市地図が付されているが、そのうち KL のカラー刷りのそれは、既述のように、きわめて詳細な社会地図を描出しており、この一枚の地図だけで 1970 年代末(1980 年)当時の KL を相当程度、鳥瞰イメージできるものとなっている(評者にとっては、この 1 枚の地図が本書における最もすぐれた成果の一つであると高く評価したい)。

第三に、地図とあわせて、巻末には現地の景観を撮影した 14 点のカラー写真が付されている(本書の分量からすれば少ないかもしれないが)。地図とともに、カラー写真は、現地の実態をリアルに伝えるための手法として有用である。地理的実態を伝えるのに、長文をもって記述するよりも、こうした地理写真のほうが時として多くを伝えてくれるからである。

第四に、本書は 1970 年代のマレーシアの都市化過程に言及しようとしており、1970 年と 80 年両年次のセンサス間データの分析を行ってはいるが、現地調査は、1981 年 2 月からにマラヤ大学の地理学教室の協力を得て 17ヵ月に及ぶ現地調査を遂行した研究の成果である。したがって、マレーシアの集落・都市的各地に関する記述は、1981 ～ 82 年当時の状況が描かれている。現地での見聞のみならず、地元民に対するアンケート調査や聴き取りの成果にもとづいて記述がなされてはいるが、全体を通して、本書のアプローチの仕

方は俯瞰的であり、対象地域のリアルな実態、現地住民の肉声が十分に伝わってこない点が惜しまれる。

第五に、新繁華街の躍動するブキット＝ビンタン界隈や KL 市民（KL-lites）が謳歌する新たな「都会生活」に関する記述は、ほかの部分に比べて活き活きとした描写となっているが、その裏通りや庶民街に横溢する露天商・屋台商そして行商人などが醸し出す活気に満ちた路上経済に関わる記述や、庶民が深く関わる可視的な風景描写が欠落している点は、都市フィールドワーカーの立場からすれば、肯けるものではない。

第六に、KL の社会地理に関する究明においては、既述のように、当時の KL におけるスクォッター問題に関する著者 Kühne の「読み」は、結果的には誤っていたという点をあらためて指摘しておきたい。1990 年代半ばまで、KL は「スクォッター都市」と揶揄されねばならなかったからである。誤解を恐れずに言えば、Kühne は、首都 KL の「光」（bright）を強調する傾向が強く、都市的貧困という「影」（荒廃：blight）の側面に対する視点が希薄であったように思われる。

〔付記〕本稿を、2006 年 3 月に立命館大学文学部地理学専攻教授を定年退職される須原芙士雄先生に対し、その約 30 年にわたるご指導ご鞭撻に対する謝意をこめて謹呈させていただきたい。なお、本稿は、立命館大学学外研究制度（2003 年度後期［B］：2003 年 9 月 26 日～ 2004 年 3 月 31 日）、立命館大学研究助成（2003・2004 年度［一般研究］）および 2003 ～ 2005 年度科学研究費補助金（基盤研究［A］・海外学術）「スラム地区住民の自生的リーダーシップに関する地域間比較研究」（研究代表者：江口信清）の助成金を活用して行った研究成果の一部である。記して、関係者、関係機関に御礼申し上げたい。

注

1）本書は、Kühne による前著 *Urbanisation in Malaysia-Analyse Eines Prozesses*（Otto Harrassowitz: Wiesbaden, 1976, 400S）の後編に相当する。前著では、古代から西洋植民地支配の時代を経て第二次大戦後の独立期に至るまでのマレーシアの都市化状況について、5 つの段階に区分しての論述を試みている。

2）マレーシアのアカデミズム地理学を回顧した McGee や Voon の論考においても、ドイツ地理学の貢献に関する記述はない。① McGee, T. G.: Geographical Studies of Malaysia: An Iconoclastic Viewpoint, in John A. Lent and Kent Mulliner (eds.): *Malaysian Studies: Archaeology, Historiography, Geography, and Bibliography* (Southeast Asian Studies Monograph Series, No. 11), Northern Illinois University, 1985, pp. 172–183, ② Voon, P-K.: Geography Education in Malaysia, *Malaysian Journal of Tropical Geography*, 21–2, 1990, pp. 97–111.

3）藤巻正己「ブミプトラ政策とマレーシアの都市社会変動―多民族都市クアラルンプルのスクォッター社会―」、（アジア地理研究会編『変貌するアジア―NIEs・ASEAN の開発と地域変容―』古今書院、1990 年）、183 ～ 205 頁。

4）Everse, H-D.: Urbanisation and Urban Conflict in Southeast Asia, *Asian Survey* 15–9, 1975, pp. 775–785.

5）前掲 3）。

6）①藤巻正己「クアラルンプルの生きられたスクォッター・カンポン―1980 年代マレーシア都市下層社会の風景―」、（江口信清編『「貧困の文化」再考』有斐閣、1998 年）、113 ～ 176 頁、②藤巻正己「1990 年代クアラルンプルのスクォッター問題と再定住政策」、（大阪市立大学経済研究所監修、生田真人・松澤俊雄編『アジアの大都市［3］クアラルンプル・シンガポール』日本評論社、2000 年）、91 ～ 120 頁。③藤巻正己「クアラルンプルの都市美化政策とスクォッター―新聞記事に描かれたスクォッター・イメージ―」、（藤巻正己編『生活世界としての「スラム」―外部者の言説・住民の肉声―』（編著）古今書院、2001 年）、60 ～ 93 頁、④「熱帯のメトロポリス　クアラルンプル断章―スクォッター都市から世界都市へ？―」、（『地域研究論集』5–2、2003 年）、79 ～ 93 頁ほかによる。

7）① Jamilah Ariffin ed.: *Poverty amidst Plenty; Research Findings and the Gender in Malaysia*, Pelanduk Publications, 1993, ② Kahn, J. S.: Growth, Economic Transformation, Culture and the Middle Classes in Malaysia, in Robinson, R. &

Goodman, D. S. G. ed.: *The New Rich in Asia: Mobile Phones, McDonald's and Middle-class Revolution*, Routledge, 1993, pp. 49–75.

8）① McGee, T. G.: *The Southeast Asian City: A Social Geography of the Primate Cities of Southeast Asia*, 1967, Frederick A. Praeger, ② McGee, T. G.: *The Urbanization Process in the Third World: Explorarions in Search of a Theory*, G. Bell and Sons, 1971.

9）① Lee, B-T.: Patterns of Urban Residential Segregation:, The Case of Kuala Lumpur, *The Journal of Tropical Geography* 43, 1976, pp. 41–48, ② Lee, B-T.: Malay Urbanisation and the Ethnic Profile of Urban Centres in Peninsular Malaysia, *Journal of Southeast Asian Studies* 7, 1977, pp. 224–234, ③ Lee, B-T.: Urban Ethnicity and Urbanization in Peninsular Malaysia, *Prisma* 17, 1980, pp. 58–71.

10）Sidhu, M. S.: *Kuala Lumpur and its Population*, University of Malaya Press, 1978.

11）Lim, H-K.: *The Evolution of the Urban System in Malaya*, Penerbit Universiti Malaya 1978.

12）Jackson, J. C.: The Structure and Functions of Small Malaysian Towns, *Transactions of the Institute of British Geographers* 61, 1974, pp. 65–80.

13）Leinbach, T. R.: The Spread of Modernization in Malaya 1895–1969, *Tidschrift Voor Economi en Sociale Geographie* 63–3, 1972, pp. 262–277.

14）Aiken, S. R.: Squatters and Squatter Settlements in Kuala Lumpur, *Geographical Review* 71–2, 1981, pp. 158–175.

15）①Johnstone, M. A.: Urban Squatters and Unconventioal Housing in Peninsular Malaysia, *The Journal of Tropical Geography* 49, 1979, pp. 19–33, ② Johnstone, M. A.: The Evolution of Squatter Settlements in Peninsular Malaysian Cities, *Journal of Southeast Asian Studies* 12–2, 1981, pp. 364–380.

16）Rimmer, P. J. & G. C. H. Cho: Urbanization of Malays since Independence, *Journal of Southeast Asian Studies* 12–2, 1981, pp. 349–363.

17）生田真人は、クランバレー大都市地域を「多核的都市圏」とみなしている。しかし、1970 年代から KL 南東郊外のバンギ Bangi、同北西郊外のラワン Rawan などで、ニュータウン建設が着手されはじめていたものの、1980 年時点では、明確な多核的構造を成すに至ってはいなかった。①生田真人「クアラルンプル―多核的都市圏の形成―」、（大阪市立大学経済研究所編『世界の大都市 6　バンコク・クアラルンプル・シンガポール・ジャカルタ』東京大学出版会、1989 年）、69 ～ 98 頁、②生田真人「多核都市圏の形成」、（大阪市立大学経済研究所監修、生田真人・松澤俊雄編『アジアの大都市［3］クアラルンプル・シンガポール』日本評論社、2000 年）、1 ～ 23 頁。

18）中核与党の UMNO（マレー人統一国民組織）は、全国のマレー人に首都建設のための貢献を呼びかけたことにより、数多くのマレー人新規移住者の流入をみた。しかし廉価住宅の建設が立遅れていたため、UMNO がマレー人新規移住者に対して、未利用地での仮居住許可権（TOL: Temporary Occupational License）取得の便宜をはかった可能性がある。結果として各地にマレー人スクォッター集落が発生することとなった。

19）1969 年 5 月 13 日に勃発した民族衝突事件の舞台が、こうした民族混住地区であったことを示唆している。

20）Kühne の文章中、ときおり「インドネシア人」が記載されているが、マレーシア国籍を有す「その他」に含まれるそれなのか、外国人労働者としてのそれなのかが不明である。1980 年代後半から、慢性的な労働力不足に加え、マレーシア経済の急成長に伴いインドネシア人をはじめとする外国人労働者の流入が本格化するが、それ以前の1970年代にすでに出稼ぎ労働者としてのインドネシア人の居住が確認されても奇異ではない。実際、本文中のアンパン地区の記述の中で、インドネシア人出稼ぎ労働者（indonesische Gastarbeiter）という語句がある。

21）当該地区の Kg. Haji Abdullah Hukum は 19 世紀末にスマトラ移民により成立した巨大な都市カンポンであるが、その後、スマトラ移民などのインドネシア人は民族カテゴリー上「マレー人」に組み込まれていった。加えて、半島各地からのマレー人の流入があったことからも、同集落は「マレー」系であるとみなされてきた。しかし、本文中の Kühne の記述では「インド（indischer）系スクォッター地区に一部マレー人が居住している」とある。「インドネシア系」と表記すべきを「インド系」と書き誤ったか？

22）前掲 18）。

23）このパラグラフで描かれているカンポン＝バルで看取された社会地理的プロセスは、いわゆる「フィルタリング」（filtering）現象にほかならない。なお、これまで、カンポン＝バルなどのマレー人保留地は、マレー人間での賃貸、譲渡だけが認められ、また大規模な商業開発も制約されてきたが、政府は 2004 年に、都市空間の高度利用、再開発プロジェクトが進む市街地の只中に残されているカンポン＝バルの特権的地位の見直し構想を打ち出した。これにより、すべてのマレー人保留地は、開発を目的とする非マレー人に対して60年間リースで譲渡できるよ

うになる。①【*New Strait Times*: August 20, 2004】Commercial value of Malay reserve land set to soar with amendments、②【*Star*: August 20, 2004】Freeing Malay land/Overhaul of laws to allow development。

24）前掲 9）①。

25）Dewan Bandaraya Kuala Lumpur, *Kuala Lumpur Structural Plan*, 1984.

26）McGee は、途上国の都市雑業部門に参加する下層大衆を「プロトプロレタリアート」とみなすべきであると提起している。McGee, T. G.: The Persistence of the Proto-Proletariat Occupational Structures and Planning for the Future of Third World Cities, *Progress in Geography* 9, 1976, pp. 3–38.

27）藤巻正己「都市スクォッターの政治社会論―半島マレーシアの「対立の構図」との脈絡において―」、南方文化 21、1994 年、103 ～ 122 頁。

28）前掲 6）。

29）Wehbring, K.: *Squatters in the Federal Territory; Analysis and Program Recommendations*, unpublished report submitted to the Urban Development Authority 1976.

30）前掲 8）①。